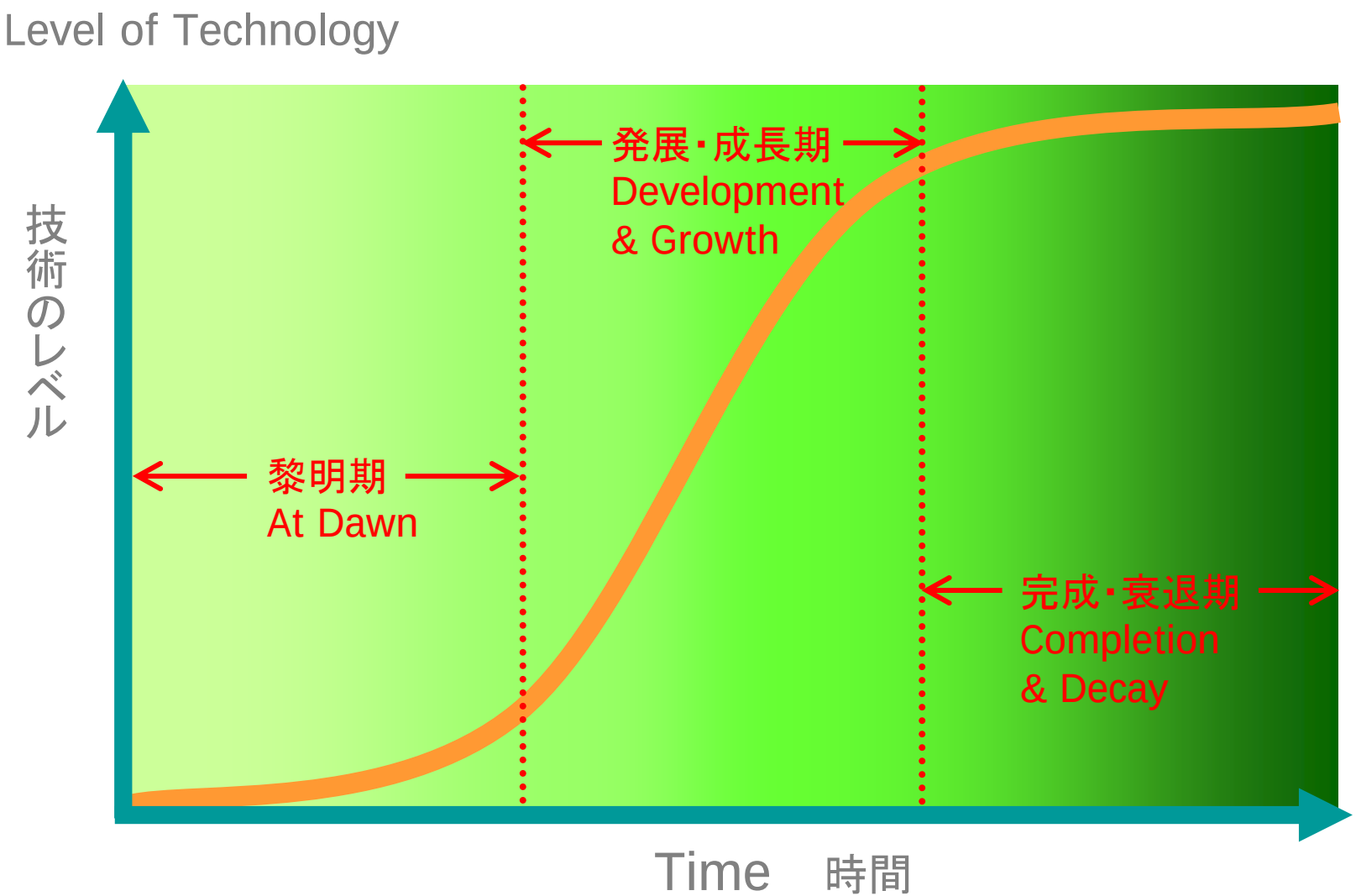
発展・成長期におけるOS研究開発

2007年5月7日

所　眞理雄

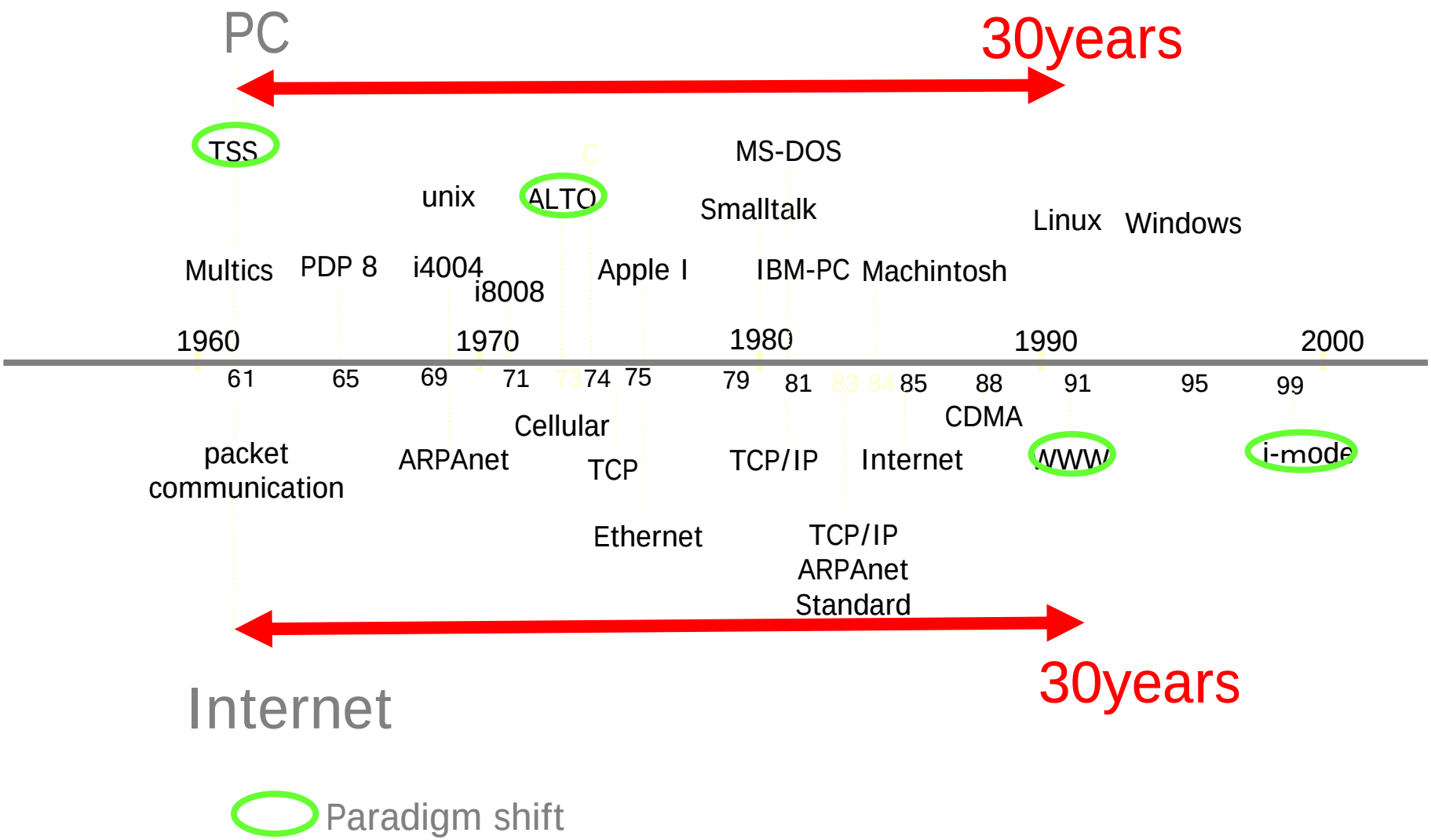
（ソニー（株）　コーポレートエグゼクティブSVP、
（株）ソニーコンピュータサイエンス研究所　代表取締役社長）

Technology Development S-Curve
技術発展のS字曲線



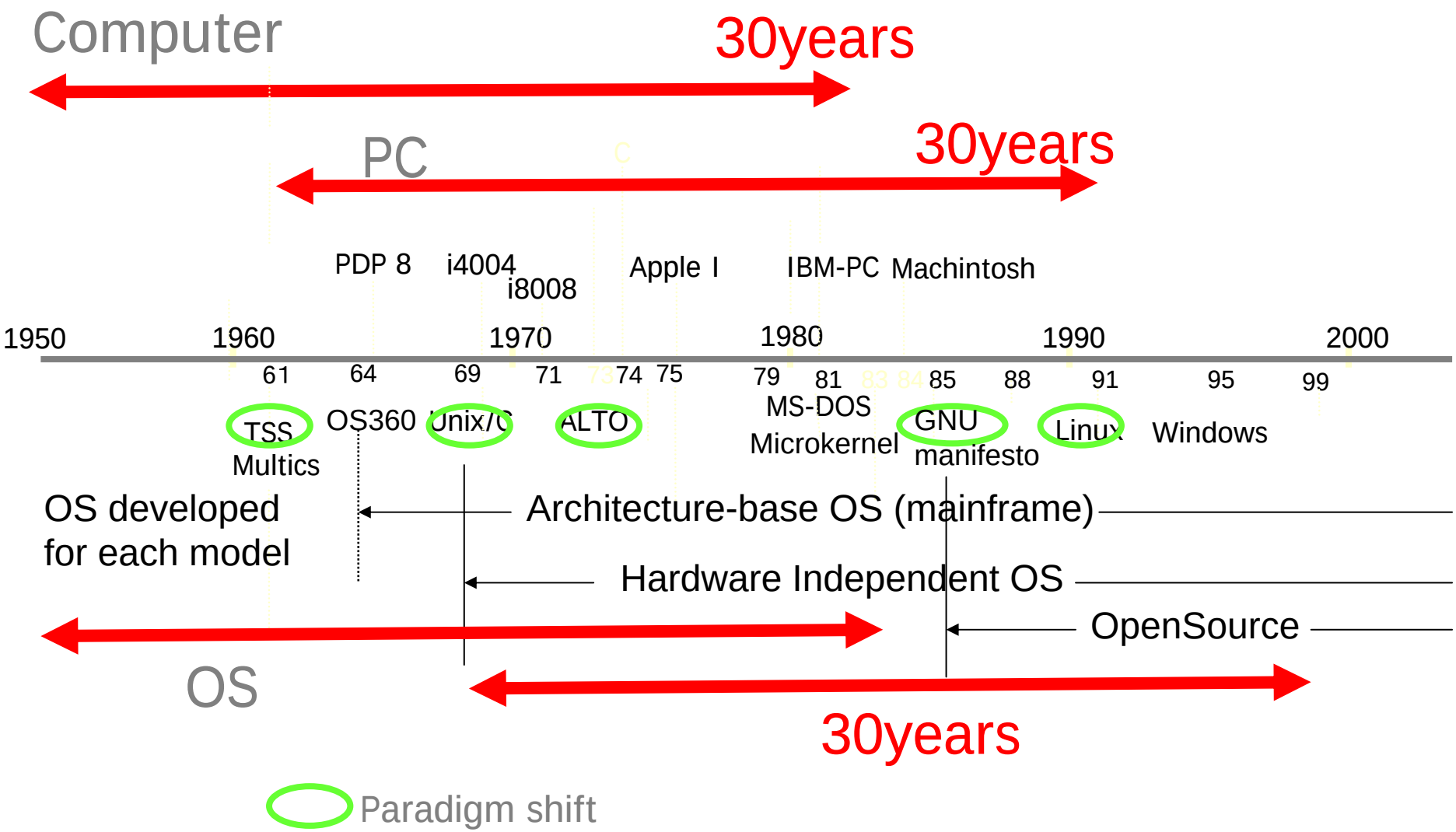
Research Investment and Management
研究投資とマネージメント

History of PC and Internet
PCとインターネットの歴史



Paradigm shift

History of Computer & OS
コンピュータとOSの歴史



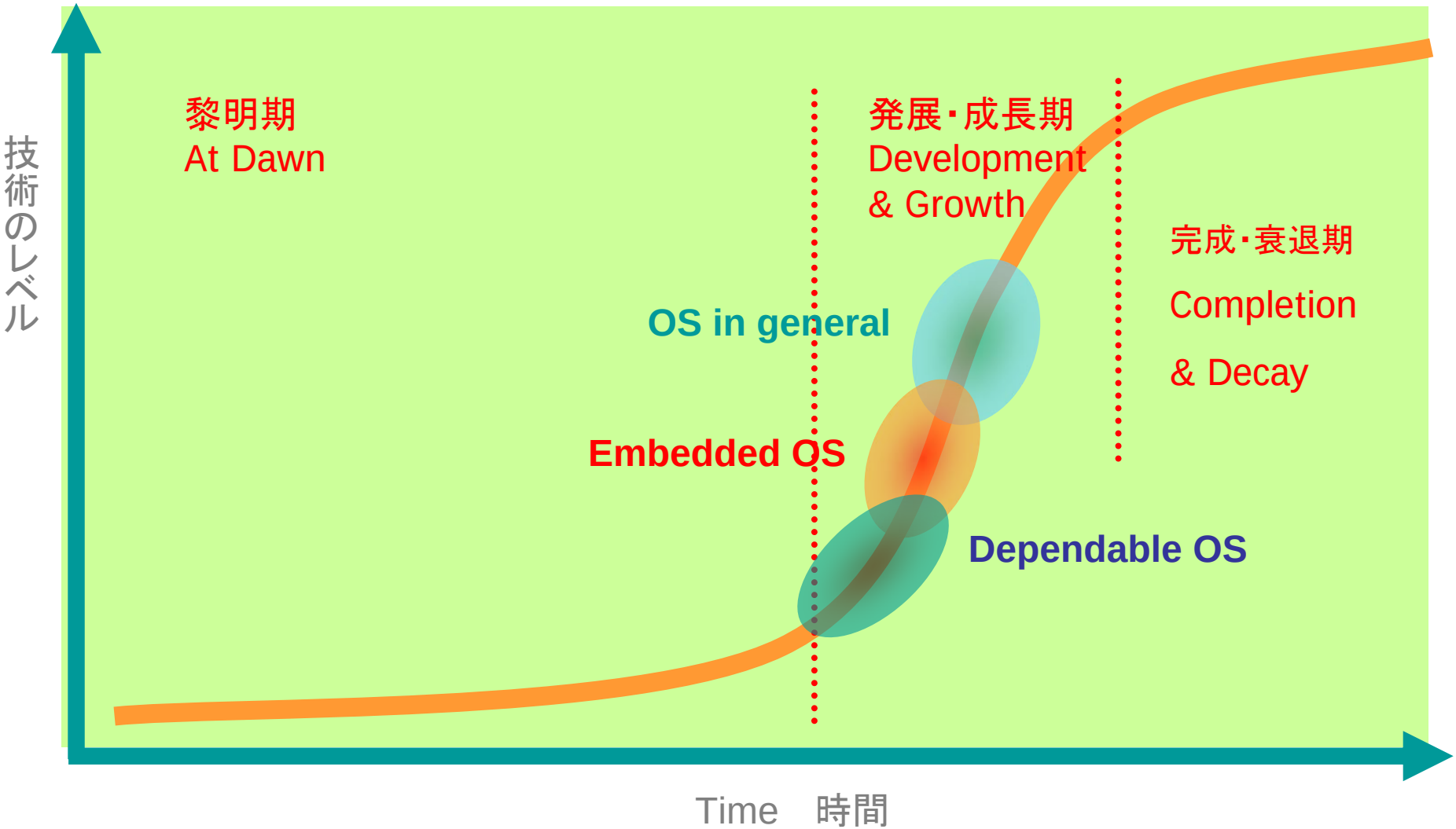
情報処理技術は普及・標準化領域

- 情報処理技術の殆どは新規技術領域ではない（基礎研究領域ではない）
- 情報処理技術の殆どは競争領域ではない（差異化技術領域ではない）
- 情報処理技術の殆どは普及・標準化領域である。（QCDI、寡占化、国際標準必須特許）

OS技術の現状と開発の方向性

- 既にOS技術は技術の発展・成長期にあり、寡占化・標準化が進んでいる。利用者を着実に得るためには、ここで全く新たなOSを一から作ることは得策でない。
- しかしながら、市場を寡占しているOSは（WindowsにせよLinuxにせよ）簡易型OSの改良型であり、今後必須となるディペンダビリティーの要求を満足できない
- 従って、既存のオープンソースOSを利用しつつ、マイクロカーネル・ハイパーカーネル化、バーチャルマシン化などによって（システムコール・APIのコンパティビリティーを保ちつつ）、ディペンダビリティーを備えた次世代組込みシステムのためのOSを開発することが現実的であろう。

Development of OS



まとめ

- 発展・成長期の研究開発をいかに効率的に行うか
  - 目的、目標、スケジュールの明確化
  - 開発プロセス手法の利用
  - ユーザーの確保
  - 他者による特許・著作権などの負担軽減
  - 情報共有の徹底